

■ PCN だより

PCN Volume 63, Number 2 の紹介 (その1)

2009年4月発行のPCN Vol. 63, No. 2には、PCN Frontier Reviewが1本、Regular Articleが12本、Short Communicationが7本、Letters to the Editorが7本、掲載されている。今回はこの中から外国から投稿されたRegular Article 6本、Short Communication 1本の内容を紹介する。

Regular Article

1. Reliability and validity of the Thai version of the WHO-Five Well-Being Index in primary care patients

R. Saipanish, M. Lotrakul and S. Sumrithe

WHO-5項目ウェルビーイングインデックス(タイ語版)のプライマリーケア診療における信頼性と妥当性の検討

【目的】タイでは医師数の不足のためにプライマリーケア医師によるうつ病への対応が必要とされている。WHOの5項目ウェルビーイングインデックスは簡便であり、プライマリーケア診療における大うつ病のスクリーニングにおいての有用性と信頼性を検討した。【方法】WHO5項目のウェルビーイングインデックスの英語版をタイ語(WHO-5-T)に翻訳し、プライマリーケア医の診療における300名の患者に使用した。さらに大うつ病の診断のためにMini International Neuropsychiatric Interviewを、重症度の評価のためにHamilton Rating Scale for Depressionを評価した。【結果】274名について解析したが、平均年齢は44.6±14.7歳、73.7%が女性であった。WHO-5-Tの平均得点は14.32±5.26であった。

クロンバッハ係数は $\alpha=0.87$ であり、Hamilton Rating Scale for Depressionとの相関は $r=-0.54$; <0.001 であった。WHO-5-Tのカットオフ値を12点未満とすると、感度0.89、特異性0.71でうつ病を見い出すことができた。【結論】WHO5項目のウェルビーイングインデックスのタイ語版はカットオフ値を12点未満としてプライマリーケア診療の場においてうつ病の診断のために信頼性と妥当性を有することが示された。

2. Better efficacy for the osmotic release oral system methylphenidate among poor adherents to immediate-release methylphenidate in the three ADHD subtypes

W.-J. Chou, M.-C. Chou, R.-F. Tzang, Y.-C. Hsu, S. S.-F. Gau, S.-J. Chen, Y.-Y. Wu, Y.-F. Huang, H.-Y. Liang and H. Cheng

直接放出型メチルフェニデート剤型に対して低アドヒアランスを示すADHDの三亜型に対して浸透圧放出型メチルフェニデート剤型にはすぐれた効果が認められる

【目的】直接放出型メチルフェニデート製剤(IR-MPH)から浸透圧放出型メチルフェニデート製剤(OROS-MPH)への切り替えを選択する要因について検討するために、台湾におけるADHD患者についてOROS-MPHの有用性について、多施設・前向き観察研究により評価した。【方法】対象はIR-MPH治療にてアドヒアランスの低かった6~16歳のADHD児童240名であり、そのうちの137名がOROS-MPHに切り替えられた。児童精神科医師によりDSM-IVによ

る ADHD の診断と、ADHD サブタイプの診断、現病歴、アドヒアランス、副作用、全体的な ADHD 重症度、家庭・学校での成績を調べた。児童の症状について、親からの情報も利用した。【結果】 OROS-MPH へのスイッチングを決定している要因は、高用量、短い治療期間、IR-MPH の 1 日 3 回投与、強い無関心症状であった。多動と拒絶症状は、不注意亜型よりも ADHD 全体と多動-衝動亜型に多かった。OROS-MPH へのスイッチングは、行動上の症状と学校・家庭での評価を有意に改善したが、この改善の程度は ADHD 全体において、次いで不注意型に認められた。不注意は学業成績に影響するだけでなく、学校での行動と親子関係にも影響を与えていた。また、学校での行動と親子関係は拒絶症状による影響も認められた。【結論】本研究により IR-MPH にアドヒアランスの低い児童には OROS-MPH の効果が認められたが、その効果は三亜型により異なっていた。

3. Correlation of attention deficit, rapid eye movement latency and slow wave sleep in schizophrenia patients

Y.-S. Chang, C.-Y. Hsu, S.-H. Tang, C.-Y. Lin and M.-C. Chen

統合失調症患者における注意欠陥、急速眼球運動潜時、徐波睡眠の関係について

【目的】統合失調症患者では、ポリソムノグラフィ検査 (PSG) において徐波睡眠 (SWS) の減少、REM 潜時 (REML) の短縮を呈することが知られており、SWS 減少はドパミン系の異常に、REML 短縮はムスカリン系の異常と関係するとされている。一般に、二つの独立した注意覚醒系がある。一つは頭頂葉皮質・視床領域のコリン性回路であり自律性注意反応に関与する。二つ目は前頭領野のドパミン系回路であり注意資源の随意的調節に関与する。統合失調症における注意機能低下は REML 短縮と SWS 減少と相関すると考えられている。【方法】リスペリドンにて治

療中の統合失調症の入院患者 16 名について PSG 検査と continuous performance test (CPT) とを施行し解析した。統合失調症の診断は DSM-IV により、症状評価は BPRS によった。【結果】REML は CPT におけるオMISSION エラー (<0.05)、反応時間 (<0.05) と逆相関を示し、正答率 (<0.05) と正の相関を示したが、SWS と CPT 成績との間に相関を認めなかった。【結論】CPT の各成績は異なる注意過程を反映している。オMISSION エラーは自律性注意過程の障害と関係しており、反応時間は自律反応の速度を示し、正答率は自律性と随意性注意のコントロールを示している。本研究から、REML は視床における自律性注意反応と関係していることが示唆されたが、さらに無投薬の患者数を増やして確認する必要がある。

4. Anger and functioning amongst inpatients with schizophrenia or schizoaffective disorder living in a therapeutic community

S. Fassino, F. Amianto, L. Gastaldo and P. Leombruni

治療的コミュニティにて生活する統合失調症・統合失調感情障害患者における怒りと生活機能との関係について

【目的】治療的なコミュニティにおいて生活する患者について怒りと生活機能との関係について検討した。【方法】対象は地域における治療プログラムを受けている統合失調症・統合失調感情障害の患者 44 名であり、Health of Nation Outcome Scales と Global Assessment of Functioning により評価するとともに Social Adaptation Self-evaluation Scale を用いた自己評価を用いた。精神症状の評価は Positive and Negative Symptoms Scale を用い、怒りの感情とコーピングスキルは State-Trait Anger Expression Inventory と Symptom Checklist-90 Hostility Scale とにより評価した。【結果】怒りの感情は、Positive and Negative Symptoms Scale の自傷、

多動, 身体的問題, 体重とそれぞれ独立に関係していた。また, 怒りの感情は, 家事における興味と楽しみ, 社会関係の質, 相互関係を示唆していた。【結論】怒りの感情は, 単に疾患の病理性によるものではなく, 自傷行為, スタッフからの注意要求, 地域での役割への同意, 低い社会との関係と独立に相関していることから, 怒りの感情は, 地域で生活する患者の適応レベルの問題であり, 患者の QOL の間接的な指標ともいえる。このような点を考慮して怒りへの対処方法を考慮すべきである。

5. Increased soluble tumor necrosis factor- α receptors in patients with major depressive disorder

R. Grassi-Oliveira, E. Brietzke, J. C. Pezzi, R. P. Lopes, A. L. Teixeira and M. E. Bauer

大うつ病患者における可溶性 tumor necrosis factor- α 受容体の増加

【目的】大うつ病には炎症過程の関与を示唆されている。なかでも tumor necrosis factor- α (TNF- α) はうつ病の治療標的分子として検討されてきたが, 細胞膜上の受容体 TNFR1 および TNFR2 に結合する。本研究では大うつ病患者血清中の可溶性 TNFR1 (sTNFR1) と TNFR2 (sTNFR2) を定量し, 対照群と比較した。【方法】大うつ病の女性外来患者 30 名と対照群 19 名とについて比較検討した。うつ病の重症度は Beck Depression Inventory にて, PTSD 症状は PTSD Checklist-Civilian Version にて, 児童期の虐待は Childhood Trauma Questionnaire にて評価した。血清中の TNF- α , sTNFR1, sTNFR2 は ELISA にて定量した。【結果】患者群では TNF- α 濃度に差異を認めなかったが, sTNFR1 と sTNFR2 との有意な上昇を認めた。血清中 sTNFR1 レベルは, 高年齢と PTSD 様症状とのある者で高く, sTNFR2 レベルはうつ病の症状の強いものに高い値を示していた。【結論】可溶性 TNFR の上昇は大うつ病に

おける炎症過程の活動性を示唆している。

6. The association between harmful alcohol use and internet addiction among college students: Comparison of personality

J.-Y. Yen, C.-H. Ko, C.-F. Yen, C.-S. Chen and C.-C. Chen

大学生におけるインターネット嗜癖と有害なアルコール使用との関係について: 性格の比較検討

【目的】インターネット嗜癖と有害アルコール使用との相関, インターネット嗜癖と有害アルコール使用にともなう性格傾向とについて検討した。【方法】大学生 2453 名について, 2005 年 5 月から 2006 年 5 月のあいだに Chen Internet Addiction Scale, Behavior Inhibition System and Behavior Approach System Scale (BIS/BAS), Alcohol Use Disorders Identification Test を施行した。【結果】大学生においてインターネット嗜癖は有害なアルコール使用と相関していた。インターネット中毒者は, BIS の高得点と BAS の娯楽追及の項目で高得点であった。有害なアルコール使用者は BAS の娯楽追及の項目で高い得点であったが BIS 項目では低得点であった。【結論】インターネット嗜癖はアルコール有害使用と関連している。その共通する要因として娯楽を求める性格傾向が考えられよう。

Short Communication

Musical obsession or pseudohallucination: Electrophysiological standpoint

S. K. Praharaj, N. Goyal, S. Sarkar, D. Bagati, P. Sinha and V. K. Sinha

音楽性強迫あるいは偽幻覚症: 電気生理学的見地からの症例報告

持続する不愉快な音楽性強迫症状を呈した強迫性障害の症例報告である。本症例は EEG 解析により両側前頭葉領域に高いスペクトルパワーを呈していたことが特徴であった。薬物療法にはほと

んど反応しなかったが、思考停止の方法により、
その音楽性強迫症状の程度と頻度がやや緩和され

るという特徴を示していた。

(文責：武田雅俊 PCN 編集委員長)
